

Title	西村享教授自撰略年譜
Sub Title	Biographical notes
Author	
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.55, (1989. 3) ,p.i- vi
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西村享教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西村 亨 教授 自撰略年譜

自撰略年譜

大正十五（一九二六）年 一歳（数え年）

一月二十五日東京に生まれる。祖父は近江商人。父は京大出身の技術者で、鉄道省にあって電化を専門とする。兄・姉一人ずつの末子。母は生後十一か月にして死去。継母に愛されて育つ。幼時病弱だったためと父の転任に伴って、逗子・名古屋・魚崎（現神戸市）等を転々。小学校時代の大半を魚崎で過ごし、この地の風物が印象に深い。

昭和十二（一九三七）年 十二歳

東京に転居。翌年麻布中学校に入學。

昭和十八（一九四三）年 十八歳

慶応義塾大学文学部予科入學。二クラスあった同級に松本隆信・遠藤周作・三雲夏生等が、隣のクラスに桑原三郎・藤井昇・八代修次・坂本幸児等がいる。学校らしい生活は半年ばかりで、後は勤労働員に明け暮れ、翌年からは日立製機の工場に通う。時に工員の慰安と称して劇を上演などする。

昭和二十（一九四五）年 二十歳

四月、学制短縮により学部に進学。当時学生は寥々たるもので、数十名を対象に全学講座が行われるが、それも警報のためにしばしば中断される。同月招集を受け、広島県福山の陸軍船舶兵部隊に一兵卒として入隊。四か月で終戦となり、九月復員。疎開先の秋田県小坂に半年を過ごし、雪国の冬を初めて体験する。

昭和二十一（一九四六）年 二十一歳

一月、家の明け渡しを求めて上京。初めて折口信夫先生の教室に出る。明日の予想が立たぬインフレーションのため、とりあえず追試験を受けて進級する。結果として学部での勉学は二年間に過ぎないことになる。玉川等々力の家が戻って、四月から学業に復する。折口先生の新古今集その他の講義に心酔。その教室において池田弥三郎先生と知り、生涯恩顧を受けることになる。年末春日若宮の御祭を見学。以後、祭祀・芸能の採訪をこととする。

昭和二十二（一九四七）年 二十二歳

中尾達郎・清崎敏郎とともに鳥船社の一員に加えられる。七月十一日、慶応義塾創立九十年の記念として、国文科の学生によって演劇を上演。演し物は折口信夫案、池田弥三郎・戸板康二作並びに演出の「九十年」で、主役の福沢諭吉を演ずる。

昭和二十三（一九四八）年 二十三歳

一月、新野の雪祭、山内の花祭を採訪、感銘を受ける。三月、卒業。卒業論文は「古今集における前代知識」。四月、慶応義塾中等部に国語科教員として就任。部長今宮新先生。池田弥三郎先生をリーダーとする若手教員の熱気溢れる雰囲気の中で数年を送る。この前後から十年ばかり、新劇に傾倒、主だった舞台を見るとともに、幾編かの戯曲およびラジオ・ドラマの創作を試みる。

昭和二十四（一九四九）年 二十四歳

夏休みに清崎敏郎・中尾達郎とともに東北地方に檜山舞その他の採集を行う。以後数年、東北地方あるいは三信遠の国境地方に赴くことが多い。二年遅れて中等部に就職した仲井幸二郎も採訪のメンバーに加わる。

昭和二十六(一九五二)年 二十六歳

この年度、女子高校講師を兼任。以後、昭和二十七・二十九・三十一年度にも講師を兼ねる。九月、池田先生が文学部に移り、中等部を去られる。これを契機として教員としての自己の立場などを見直すようになる。この夏、池田先生に連れられて秋田県下の番楽・獅子踊等を採集、採集法その他教えられることが多い。

昭和二十八(一九五三)年 二十八歳

八月、新野および近辺の採集の帰途、池田先生に連れられて箱根仙石原の叢隠居に折口信夫先生を見舞う。最後の対面となる。

昭和三十一(一九五六)年 三十一歳

夏前から体調の不調を覚え、秋になって肺結核と診断される。慶応病院に入院、半年の入院生活の後、自宅にあって療養の日々を送る。この間、刊行の始まった折口信夫全集の全論文を読むことができる。

昭和三十三年(一九五八)年 三十三歳

四月、教壇に復帰。なお、要注意と宣せられて、学級担任を持たず、授業時間をも軽減してもらう。椅子に横向きにかけたような気分で、ようやく学問に心を傾けるに至る。ただ、中等部生の読書指導と視聴覚教育、服装問題には力を注ぐ。

昭和三十四(一九五九)年 三十四歳

七月、病後に書いた「歌の靈験」が折口博士記念会紀要に載る。一己のためには記念すべき論文。

昭和三十七（一九六二）年 三十七歳

七月、雑誌「芸能」に「いろいろのみ事典」の連載を始める。四年半、五十四回に及ぶ。この月、結婚。晩婚で、二子をなすが、後破婚に至る。

昭和三十八（一九六三）年 三十八歳

言語文化研究所研究員を兼任。所長松本信広先生。昭和五十六年まで兼任を続け、「日本古代生活の研究」を主題として、多くの恩恵を受ける。この間、数年にわたり、池田先生に日本紀講読の会を続けていただく。

昭和三十九（一九六四）年 三十九歳

久しく中止していた研究のための旅行を再開。仲井幸二郎・竹重信幸・吉村洪等中等部の国語科の同僚と同行することが多い。

昭和四十四（一九六九）年 四十四歳

春と夏の休みに丹後の探訪を行う。苦心して「古代丹波の研究」をまとめる。

昭和四十五（一九七〇）年 四十五歳

四月、文学部に移籍。専任講師。久しぶりに池田先生と研究室を並べることになる。九月から折口信夫全集ノート編の刊行が始まる。古今集・源氏物語等の諸巻を担当。

昭和四十六（一九七一）年 四十六歳

四月、助教となる。

昭和四十七(一九七二)年 四十七歳

五月、榑原民江と再婚。心身ともに安定を得る。

昭和四十八(一九七三)年 四十八歳

十月、折口信夫先生没後二十年に当たり、池田先生が講座「古代学」を企画開催される。一週間にわたるその実施に全力をあげる。十一月、「王朝恋詞の研究」により義塾賞を受賞。

昭和四十九(一九七四)年 四十九歳

三月、池田先生の意図を受けて、「国文学研究会報」の刊行を実現。当初は檜谷昭彦と二人で交替で編集に当たる。四月、教授となる。

昭和五十(一九七五)年 五十歳

十一月、万葉旅行の途次、龍田越えの帰途激しい腰痛が起こる。月余の後本格化し、以後宿痾となる。

昭和五十二(一九七七)年 五十二歳

四月から一年間の研究休暇を得る。夏、出雲の採訪を、十一月から十二月にかけては前後四十余日にわたって奄美・沖繩の採訪を行う。ことに奄美・沖繩ののろ、信仰が衰滅寸前にあることを知り、採集の急務であることを痛感する。

昭和五十四(一九七九)年 五十四歳

七月、池田弥三郎著作集の刊行が始まる。前年から企画の相談にあずかり、二巻の編集を担当する。

昭和五十五(一九八〇)年 五十五歳

三月、「恋の文学形成の研究」によって文学博士の学位を取得する。池田先生が定年退職とともに魚津に赴任される。

この年から奄美・沖縄の信仰・祭祀を研究するグループを作り、共同研究を始める。五年にわたって毎年夏休みに調査旅行を行う。学事振興資金・松永基金の恩恵を被るところが大きい。

昭和五十七(一九八二年)年 五十七歳

四月、上京された池田先生と対面、その衰弱に衝撃を受ける。七月、池田先生死去。十月、折口信夫先生没後三十年を記念する講座「古代学」を五日間にわたり、企画開催。

昭和五十九(一九八四年)年 五十九歳

大東学園で専門学校を創設することになり、協力を求められる。四月、発足。国文学科主任として尽力するが、短大創立の約束がうやむやになったので、三年で辞する。

昭和六十(一九八五年)年 六十歳

十一月、『折口名彙と折口学』の合評会を機として折口名彙解説をまとめようという気運が起こる。若い人たちと企画を練り、以後二年半にわたりこのしごとで没頭する。

昭和六十二(一九八七年)年 六十二歳

折口信夫先生の生誕百年の記念行事が各方面で行われる。十月、国文学研究会主催の講演会と記念パーティを実施。「たぶの森の由来」を撰文、建碑。中央公論社と折衝、折口信夫全集ノート編の追補五巻が出ることにになり、この月から刊行が始まる。

昭和六十三(一九八八年)年 六十三歳

七月、大修館書店から『折口信夫事典』が刊行される。十一月、勤続四十年の表彰を受ける。

平成元(一九八九年)年 六十四歳 三月、選定年制により慶応義塾を退職。